

## 降誕節第 2 主日 説教 「神様の御手を握りしめ」要旨

牧師 黒田直人

日本キリスト教団藤沢教会 2023 年 1 月 1 日

マタイによる福音書 2 : 19-23

明けましておめでとうございます。主のご降誕を共々に祝い、恵みの中に迎えた 2023 年であります。皆様にとってこの一年が主の祝福と平安に満たされますよう心よりお祈りいたします。そこで、この日の御言葉を見て参りますと、そこに記されていることは、御子イエス様がお生まれになったばかりの聖家族の姿です。しかし、その姿は、私たちのその思い、つまり、こうあって欲しい、こうあるに違いない、こうあるべきだとの思いに照らして見るならば、聖家族に課せられた定めはあまりに過酷なものでもありました。普通であれば、新たな命を授かったことに家族中が沸き立っていいはずなのです。ところが、聖家族はそうではありません。それは、この普通のことすら許されなかったのが聖家族であるからです。マタイの前段でヘロデ王が「ベツレヘムとその周辺一帯にいた二歳以下の男の子を、一人も残らず殺させた」とあるように、救い主イエス様の誕生によって、自らの立場が危うくされるのを恐れたヘロデ王が幼子の命を付け狙っていたからです。ですから、そのことを御遣いから知らされた聖家族は、そのお告げに従ってエジプトへと逃れるしかなかったわけですが、こうして辛うじてその難を逃れることとなったのが幼子イエス様をその胸に抱く聖家族であります。それがまさに聖家族の家族としての出発でもありました。

ところが、その聖家族のもとに朗報が届けられたのです。この日の御言葉はここから話が始まっているのですが、この朗報をもたらしたものが御遣いでありました。そして、その朗報とはヘロデ王の死であります。そこで御遣いはイスラエルの地に戻るようにとヨセフに告げるのです。それは、危険が取り除かれたからでもありました。ただ、朗報を受け取ったにしては、御言葉から受ける印象はいささか抑制的であるように思います。憎きヘロデが死んで、我が子の上に降りかかった危険が取り除か

れたわけですから、全員で諸手を挙げて喜んでもおかしくはないはずなのです。ところが、御言葉はそうしたところには分け入ることなく、淡々と話を進めるのです。それは、聖家族がイスラエルに戻ってみて初めて分かったことですが、危険は完全には取り除かれてはいなかったからです。なぜなら、その子どもであるアルケラオがその後継者としてユダヤ全土を支配していたからです。ですから、それを知って、ヨセフ、マリア、イエスの聖家族が怖じ気づくのは当然です。戻れと言ったから戻ってきたのに、何だ、何にも変わってはいないじゃないか、ヨセフがそう思ったかどうかは分かりませんが、御言葉が抑制的であるのはそのためです。このように、聖家族の置かれた状況、この世の現実、ヘロデーの死をもって何も変わることはなかったのです。

そして、このことはまた、私たちがこうしてこの世に生を受けていることのもう一つの現実を現しているように思います。御言葉が「光が闇の中で輝いている」と語るように、光を感じつつも、同時に闇に包まれているのが、私たちがこの世に生を受け、生きるということでもあるからです。ですから、聖家族もその例外ではなかったということですが、まさにこのような現実の中を人として私たちと同じ命を歩み始めたのがイエス様というお方でありました。しかし、この世の苦しみの中で家族としての歩みを歩み始めた聖家族はそうしたものにただ翻弄され、飲み込まれてしまったわけではありません。「ガリラヤのナザレに行って住め」とのお告げをヨセフは夢の中で受けたのですが、そこで「ナザレの人と呼ばれる」までに健やかに成長することになったのがイエス様であったからです。御言葉はそれについて「主が預言者たちを通して言われていたことが実現するためであった」と説明するのですが、このように、御言葉が、イエス様の誕生からヘロデ王の

幼児虐殺と、イエス様の誕生にまつわる一連の出来事を神様の御心であると総括するのは、イエス様のお誕生も、聖家族に課せられたその過酷な定めも、すべては神様の御心の内に置かれるものであったからです。

ところで、その御心であります、それを伝えているのが御遣いでありますが、この神の使いが夢の中に現れ、主の御心を伝えるというモチーフは聖書の中ではよく見られるものです。それは、神顕現の一形態であり、つまりは、神様が現れる上での聖書特有の文学的表現であるということです。ですから、ヨセフがそれに従って難を逃れ、御心の実現したというその描写が非常に分かりやすいのは、この聖書特有のお約束に従ったものでもあるからです。そして、そこで重要な点は、ヨセフ始め聖家族が神様の御心に従順であったということです。それは、御心への従順こそが話をわかりやすくするためのお約束であり、御心に叶ったことでもあるからです。そして、従順とはつまり、ヨセフが神様を畏れ敬い、その御心に従ったのは神様への畏れを見失わなかったということでもあります、つまりは、この過酷な現実の中にあって進むべき道が示されたのは、聖家族が神様から与えられた知恵をもって現実に対処することができたからです。

従って、ヨセフの従順は知恵ゆえのものでもあります、それゆえ、御言葉は、神様の御心に聞いていく上で、「神を畏れることが知恵の始まり」と言われておりますように、「知恵」を重視するのです。それは、聖家族の運命がこの知恵によって切り開かれたことから分かるように、御言葉を通して聞いているこの知恵こそが御心に適った形で私たちの歩みを整え、導くことにもなるからです。それゆえ、年頭に当たって私たちがこの御言葉にこうして聞いているのは、それこそここに御心が現されているからだとも言えるのですが、それゆえ、知恵をもって御心にお従いすることは、いつも、絶えず、どんな場合でも、私たちに求められることにもなるわけです。ただ、そこで一つ、御言葉は、知恵がなぜ

大切かを示すために私たちに重要なことを語ってくれています。それは、この従うということが非常にリスクなものでもあるということです。ヨセフの帰還がまさにそのことを知らしめてくれているわけですが、それは、御心に従うことが、必ずしも私たちの求める正解、方向へと導くものではないからです。だから、私たちは迷い、途方に暮れ、苦しむことにもなるのですが、それは、家族としての歩みを歩み始めたばかりの聖家族もそうでした。それは、ヨセフには夫としても父としても、また、マリアには妻としても母としても、幼子イエス様と同じように、彼らにはこの世を生きる上での経験も知恵もまだまだであったからです。このようにすべてがないないづくしであったのがこの時の聖家族であり、ですから、すぐれるものは神様の御心以外何もない、それが家族として歩み始めたばかりの聖家族であったということです。しかし、そこに御心が間違いなく置かれていた、御言葉が私たちに語りかけるのはこのことなのです。

従って、聖家族がその落ち着き先を見つけ出し、イエス様がそこで成長することになったのは、その聖家族の上に御心が置かれ、御心のままに生きるにふさわしい場所が与えられたからです。ですから、イエス様がそうであるように、命が命として生まれ、養われるためには、その落ち着きどころが大事なのです。どこでもいい、何でもいいということではなく、御心によって示された落ち着きどころが必要だということです。それゆえ、私たち信仰者に必要なものは、神様を畏れ、御心のままに生きるための知恵と、この知恵を身につける上での落ち着き場所です。それは、聖家族がそうであるように、私たち信仰者がすでにイエス様を内に宿す者でもあるからです。ですから、クリスマスは、イエス様がお生まれになったことだけを祝うものではありません。活ける神、人として歩んだ神、そのお方の誕生を祝うということは、遠い昔の一瞬の輝きを覚えていることではないからです。神様の御心とは、提示され、後は知らないよというのではなく、その後も同じ

ように続いていくものでもあるからです。神様の御心が信じる人々の中でリアリティーをもって受け止められてきたのはそのためであり、つまりは、私たちの信仰は、この神様のリアリティーに触れてこそのものであるということです。

そして、御言葉はそれをインマヌエル、神我らと共にいます、というこの一言で語るのですが、ですから、神我らと共にいます、ということは、言葉の上だけで終わるものではありません。そこが私たちの居場所であり、そこに知恵が置かれているのです。それゆえ、その居場所に私たちがいればこそ、聖家族と同じように、私たちとも神様は共にいてくださり、導いてくださっていることを経験するのです。そして、それは、どんな時にも、どんな場所でも、私たちが何を考え、何を思い、どんな状況に置かれようとも神様が私たちと共にいてくださっているからです。ですから、極言すれば、ここでのヨセフがそうであるように、神様の御心を私たちが読み間違えたとしても、それは問題にはならないということです。しまった、とそう思っても、そこを基点として再び新たな道へと導いてくださるのが私たちの神様であるからです。ただ、家族として歩み始めたばかりの聖家族がそうであるように、その行き先はすべて分かっているわけではありません。これが神様の導きだなどと、確信をもって応えることはできないのです。ですから、そこで、それって本当なの、とその耳元で悪魔に囁かれれば、立ち所にその気持ちは大きく揺らいでしまうことにもなるわけです。そして、それがユダヤに戻り、現実を知って恐れおののくことになったヨセフとマリアであります。けれども、神様は、そのヨセフたち聖家族にふさわしい居場所を与えてくださったのです。

ですから、従うということは、無謀な冒険を強いられるものではありません。感情を押し殺すことでもなく、また、理性を働かせないことでもありません。この世の常識や物事の考え方をまったく無視することでもありません。聖家族が家族としての時歩を確実に固めていくことになったのは、

この世の現実において苦しみ、そのことを通して学んでいったからです。そして、それは、彼らにそのための居場所が与えられたからでもあります。それゆえ、御心に従順であるということは、この世の様々なことを汚れていると言って忌み嫌い、それを理由に忌避し、あげつらったりすることではありません。ましてや、自らの思いや考えに適った形で純粹であろうとすることもありません。聖家族がそうであるように、この世の現実の中にしっかりと立つことであり、そして、そこで彼らが学んだものがインマヌエル、神我らと共にいますというこの現実でもありました。彼らは、そのことをイエス様というこの神様の独り子と共にあることで知らされたわけですが、つまりは、それが御子を我が内に宿すということでもあるのです。そして、彼らにそれが分かったのは、老境を迎え、人生の終わりを見つめたその時ではありません。イエス様を通して夫婦とされ、イエス様によって父母とされ、このイエス様と共に聖家族と彼らが呼ばれるまでになったのは、その始まりにおいて神様が彼らと共にいますことを知らされたからです。けれども、知りつつも、それがどういうものかは、実際に歩み始めて、いや、歩み続ければこそ、彼らは知ることになったのです。そして、彼らがそれを知ったのは、ヨセフとマリアがただ一度として道を逸れることがなかったからではありません。

イエス様の出来事が、先週申しましたように、キリストがイエスに、イエスがキリストにと、キリストはキリストだと言わんばかりに循環論法的に語られているのは、イエス様を知るために必要なことがその説明ではなく、経験にあるからです。つまり、いつも側にいて共にあること、キリストはキリストだと私たちがそう言葉にできるのは、イエス様といつも、常に、絶えず共に歩んでいるからです。そして、それが聖家族というものであり、ですから、聖家族が聖家族であるということも、イエス様を我が内に宿すということも、それと同じことが言えるのです。イエス様をその胸に抱く聖家族は、御心によって初めから聖家

族であり、人の子であるイエス様と共に歩む中で家族としてのその絆を深くしつつも、聖家族としての歩みを彼らが最後までまっとうすることが許されたのは、彼らには家族として歩み始めるその前からイエス様が与えられていたからです。だから、聖家族は聖家族である、それ以外の何ものでもないということです。そして、その彼らがそこに止まり、そこを離れずに共に歩み続けた、そして、それは、彼らにとってそれ以外の選択肢がある意味でなかったからです。つまりは、彼らには他に行くところがなかった、家族が家族であるということはそのことであり、ですから、御心によって与えられたその居場所とは、そこしかいるところがないということでもあるのです。

ただ、私たちと同じように問題含みであったのがこの聖家族と言われているものでもありました。ですから、家族は家族というものの中には様々な問題が生じるのであり、その中でもし家族を破壊しかねないような過ちを犯すようなことがあったとしたら、そこで求められるものは何んなのか、それが悔い改めであり、赦しでもあるのです。なぜなら、御心に適った歩みを歩み続けるということは、私たちが間違いを決して犯さないことではないからです。聖家族がそうであるように、イエス様を我が内に宿しながらも、神様の右の御手を握りしめるその反対の手で、私たちは御心ではない、別の何かを握りしめてしまうことがあるからです。けれども、まただから、御言葉はその私たちに向かってこう語るのです。「御救いを喜び歌う声が主に従う人の天幕に響く。主の右の手は御力を示す。主の右の手は高く上がり 主の右の手は御力を示す。死ぬことなく、生き長らえて 主の御業を語り伝えよう。主はわたしを厳しく懲らしめられたが 死に渡すことはなさらなかった。正義の城門を開け わたしは入って主に感謝しよう。これは主の城門 主に従う人々はここに入る。」と、それは、このように主の力強い右の御手に支えられているのが私たちであるからです。

主の右の御手とは、私たちに祝福を与えるものです。それゆえ、私たちは、主の右の御手を握りしめ歩んでいるのですが、私たちが主の右の御手を握りしめるということはつまり、その左手で主の右の御手を握りしめているということです。では、その反対の右手で私たちは何を掴むのか。その右手で掴むものは共に歩む者の左手であり、このように共に歩む者に主と同じように、私たちがその右手で祝福を与えるからこそ、私たちは神の家族と呼ばれているのです。そして、私たちはそのことを御言葉を通して教えられ、聖家族がそうであるように、御心によって導かれたその場所で経験として神様を知ることになるのです。従って、私たちの居場所とは、こうして御言葉に聞いている、こうして招かれている藤沢教会であり、まただから、先ほどのみ言葉に続いて、私たちは次のように神様に向かって歌うのです。「わたしはあなたに感謝をささげる あなたは答え、救いを与えてくださった。家を建てる者の退けた石が隅の親石となった。これは主の御業 わたしたちの目には驚くべきこと。今日こそ主の御業の日。 今日を喜び祝い、喜び躍ろう。どうか主よ、わたしたちに救いを。どうか主よ、わたしたちに栄えを。祝福あれ、主の御名によって来る人に。 わたしたちは主の家からあなたたちを祝福する。主こそ神、わたしたちに光をお与えになる方。 祭壇の角のところまで 祭りのいけにえを綱でひいて行け。あなたはわたしの神、あなたに感謝をささげる」と、クリスマスシーズンのただ中、こうして新しい年を共に向かえ、神様に向かってこのように讃美の声を上げるのです。それが新年を迎えた私たちの変わらぬ姿であり、そして、私たちにそれが許されているのは、神様の御名を褒め称えることの許された場所にいるからです。ですから、新しい年もまた、私たちが私たちであるために、私たちは私たちとして、また、私たちが私たちであるからこそ、神様が示されたこの場所で神様の御心にふさわしい歩みを共に歩んで参りたいと思います。祈りましょう。